

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

辞書を引いてみよう。「抽象」というのは、「事物または表象のある側面・性質を抜き離して把握すること。」とある。このとき、大部分の具体的な情報が捨てるので、A「捨象」という行為が伴う。中身の食べられる所だけを抜き出して、外側の皮の部分捨てる、と考えるとわかりやすいだろう。

どうして、このように情報を捨てるのかというと、そうすることで、何が本質かがわかりやすくなったり、別の多数のものにも共通する一般的な概念が構築しやすくなったりするからだ。

抽象化するときに失われた情報は、不要だったわけではない。きれいさっぱり忘れてしまえ、というのではなく、いったんそれを棚に上げて考えてみよう、という意味だ。そうしないと、見かけの複雑さにとらわれ、問題の本質が見えにくくなり、結果的に判断を誤るからである。

では、「抽象」について、具体的に説明してみよう。具体的に話す場合には、「例を挙げる」ことになるので、たいてい「例えば」で始めて、あくまでも「一例」であることを示す。これは、非常に狭い限定された範囲に目を向けることであり、だからこそ「焦点」が合う。逆に言えば、周囲の広い範囲は見えなくなる。

I、小説を読んで、あるキャラクターが好きになったとする。このキャラクターのように自分もなりたいたいと憧れる。ここまでは、かなり抽象的である。もう少し、ディテールを見てみると、そのキャラクターというのは、三十代の大学の先生で、考え方がいかにも理系的だ。だから、自分も三十歳になるまでに理系に進み、大学の先生になろう、と考える。そのキャラクターがコーヒーが好きなら、自分もコーヒーを飲むことにする。話し方も真似る。Bこういった事例は、けつして珍しいことではない。スターが着ているものと同じブランドのファッションが売れたりする。

このように、自分が好きなものが、どんな外見なのか、という「見える」特徴が、つまり「具体的」なものの代表と言える。これらを忠実に取り入れることによつて、ではその大好きなキャラクターにあなたはなれるだろうか？ 実はそうではない。

II、同じ三十代で大学の先生で、コーヒーが好きなのでも、あなたが嫌いだと思うようなタイプの人物がいるからだ。その条件を満たす人間はかなりたくさんいる。人間のタイプは、そんな外面だけでは捉えられないことは自明だろう。

では、あなたはそのキャラクターのどこが好きなのか？ それは、生き方だったり、考え方だったり、人に対するちよつとした反応だったり、あるいは人生そのものだったりする。簡単に「ここです。」と説明ができるものではないかもしれない。ただ、なんとなく「そういう人」が好きだ、ということは確かなのだが。

このとき、「そういう人」というあなたの頭の中にある漠然とした概念が、すなわち「抽象」なのである。これは、人に伝達できないかもしれない。いろいろな場面で行動したのかというシーンをいくつか話して、「だいたいそういう人なんだ。」とぼんやりとした印象を伝えるしかないだろう。

この漠然とした人物の印象を人に伝えるとき、小説のキャラクターというシンボルがあると、とても便利だ。そのキャラクターの名前を出して、「〇〇先生の

ような人」と言えば、その小説を知っている人ならば伝わるかもしれない。当然ながら、たとえ同じ小説を読んでいても、同じキャラクターに対して各自が違った印象を持っているはずだから、正確にイメージが伝わっている保証は全然ない。ただ、その場の「言葉」が通じるだけの話である。

この「くのような」というよく使われる表現が、抽象的なものを示す機能がある、と意識している人はあまりいないかもしれない。しかし、例えば、事件を報道するニュースで、「パールのようなもので金庫を壊されていた。」と言っているのを聞いたことがあるだろう。これは、パールとは限らないが、結果から判断して、パールに相当するような機能を持ったならかの道具を使った、と推定しているのである。パールかどうか、具体的にはわからないが、「機能」という本質的なものを抽出して述べているわけだ。似たもので、「〇〇風の男性」などもよく耳にするだろう。

「パールのようなもの」と表現することで、他者にだいたいイメージを伝えることができる。それくらい破壊力を持った道具らしい、という認識を比較的簡単に持つてもらえる。搜索の段階で、パールでないものを見つけた場合にも、「あ、もしかして、これでも可能だな。」と判断ができる。単に「パール」と具体的に限定してしまうと、ほかのものを見過ごすかもしれない。このように、具体的ではなく、抽象的な表現による伝達が有利なことは、実は非常に多いのだ。

ここで注目したいのは、「パール」よりも「パールのようなもの」の方が集合として大きいということ。つまり、抽象化することによって、そこに含まれる対象の数が多くなる。適合する範囲が広がるために、焦点が合わず「ぼやけた」感じがするけれど、逆に言えば、いろいろなものに適用できる可能性が広がる。

「くのような」とつけ加えただけで、抽象化されるのはなぜだろう。これは、そもそも言語というものが、コミュニケーションの行き違いを防ぐために、意味を限定する性質を持っているからである。言葉は、たとえ抽象的な概念を示すために生まれたものであっても、その言葉が一般に流通するときには、ある程度の「定義」がなされる。言葉の意味をみんなで確認し合い、こういう意味に限定しよう、と決めるわけである。このとき、言葉は具体的なものになる。例えば、初めて発見されたものは、当初「くのような動物」とか、「く<sub>1</sub>に似た植物」といったように抽象的に表現されるが、その存在が多数の認めるところとなると、しっかりとした定義を決めて、新しい名前がつけられる。多くの言葉は、このような洗礼を受けたうえで広まるのである。

「くのような」をつけることで、この「定義」の堅苦しさを捨てる、すなわち捨象しているわけだ。子供は言葉をたくさん覚えて大人になるが、言葉を覚えることで、本来は抽象的に捉えていたイメージが、だんだん言葉という記号で代替されるようになる。

具体的なものというのは、最初は物事に付随するたぐさんの情報として提示されるが、そのうちにごく少数の言葉で、それを記憶し、伝達し、そして思考するようになる。言葉も具体的なものの一つである。覚えやすいし、伝わりやすい。それ以外の多くのイメージ、あるいはディテールは次第に失われる。

そんな「言葉」に比べて、「くのようなもの」という漠然としたイメージは、覚えにくく、伝えにくい、それを受け止めた人の頭脳が、展開し、想像し、補完するため、情報としてはむしろ多くを伝え、時間が経つても多くのイメージが結果として残る。

どんなものにも、いろいろな面がある。だから、少数の言葉でイメージを限定しないことが重要なのだ。

く<sub>1</sub>とく<sub>2</sub>と見えているもの(ピントが合っているもの)を、わざと目を細め、ぼんやりと見てみよう。そうすると、そこにあるものを抽象的に捉えることができる。知り合いの人を見ているときでも、目を細めてみれば、もう誰なのかわからない。ただ、ぼんやりと、一人の人間がそこにいるとしかわからない。ときには、そういったぼんやりとしたものの見方が必要になるのである。

例えば、その人の行動が問題になっていて、それが許されることなのか、それとも責任を追及すべき悪事なのか、を判断しなければならぬとき、自分とその人の関係をいったん忘れて、一人の人間として見る必要がある場合が多い。あなたがもし裁判官だったら、そういう目が常に不可欠だろう。

抽象的にものを見ることのメリットの一つは、このような「客観視」にある。別の言葉で言えば、「公平性」である。

「結局のところ、これは単なる個人と個人の喧嘩なんじゃない？」とか、「冷静になって考えてみると、今現在の問題だけでいがみ合っているのではなくて、もっと以前から尾を引いているものがあるようだ。」というようなもの言いをするとき、「結局のところ」や「冷静になって考えてみると」というのは、上記の「ぼんやりと見る」視点で客観的に捉えたら、と同じ意味なのだ。

抽象的にものを見ることで得られるメリットが、もう一つある。どちらかと言うと、僕はこちらの方が有益だと思う。

それは、抽象化によって、適用できる範囲が広がり、類似したものを連想しやすくなることである。これによって、ある知見が、まったく別のものに利用できるチャンスが生まれるし、また、全然違った分野から、使えるアイデアを引っ張ってくることも可能になる。思い当たることがある人は、きつと「抽象的思考」が既にできていると言える。

問 二重傍線部 a・b の本文中における意味として最も適当なものを、それぞれ次から選べ。 知

a ア わざと知らないふりをして イ すっかり忘れて ウ 大事に保管して エ 手の届かないところに隠して

b ア 抽象 イ 事例 ウ 細部 エ 対象

答 a ア b ウ

問 空欄 I・II に入る語句として最も適当なものを、それぞれ次から選べ。 思

ア しかし イ つまり ウ 例えば エ あるいは オ なぜなら

答 I ウ II オ

問 傍線部 A とはどのような行為か。最も適当なものを、次から選べ。 思

A 事物を複雑にさせている情報を取り除き、単純化をはかること。

I 事物の狭い範囲に目を向けて、本質に焦点を当てようとする。

ウ 事物の広い範囲には目を向けずに、一般的な概念にたどり着くこと。

E 事物にある具体的な情報を捨てて、事物の本質を見えやすくすること。

O 事物にまつわる不必要な情報を捨てて、本質が見えるようにすること。

答 E

問 傍線部 B とは、どのような事例か。それを説明した次の文の空欄に入る適当な語句を、本文中から七字で抜き出せ。 思

懂れの対象の [ ] を真似る事例。

答 「見える」特徴

問 傍線部Cのように言えるのはなぜか。それを説明した次の文の空欄に入る二字熟語を、本文中からそれぞれ抜き出せ。思

「ボールのような」と表現することで、「ボール」の具体的な面を [ ① ] し、「ボール」の本質的な [ ② ] のみを示すことができるから。

答 ① 捨象 ② 機能

問 傍線部Dと表現することで、どのような道具であることを伝えられるのか。本文中の語句を用いて答えよ。思

答 ボールに相当する破壊力を持った道具。 \* 「ボール」に相当する機能。」では不十分。

問 傍線部Eとあるが、どのような点で有利なのか。最も適当なものを、次から選べ。思

ア 表現に含まれる対象の数が多くなるので、伝えたいもののイメージを他者に伝えやすい点。

イ 表現によって対象があいまいになるので、間違ったイメージを他者に伝えなくてすむ点。

ウ 表現によって対象をいろいろなものに適用できるので、聞き手の想像力をかきたてられる点。

エ 表現の適合する範囲が広がるので、解釈の仕方を聞き手に委ねられる点。

オ 表現の適合範囲が狭くなるので、失ったものを容易に見つけられるようになる点。

答 ア

問 傍線部Fで筆者が言いたいこととして最も適当なものを、次から選べ。思

ア 数多くの言葉で表現されるようになる。

イ 言葉によって単純化され、整理されていく。

ウ 流通している一般的な意味に訂正されていく。

エ 意味がわからなくても、暗記ができるようになる。

オ 言葉が表す限定された意味に置き換えられていく。

答 オ

問 傍線部Gについて、次の(1)・(2)に答えよ。思

(1) 「しっかりと見えているもの」とは、この場合どのようなものか。最も適当なものを、次から選べ。

ア 具体的で、多くの人に明確に発信されている情報。

イ 具体的であるがゆえに、限られた情報しか得られないもの。

ウ 具体的で、ディテールまで理解することが可能な言葉。

工 具体的であるがゆえに、言葉でしか表現できないもの。  
才 具体的であるがゆえに、細部まで理解ができているもの。

**答**  
イ

(2) 「目を細め、ぼんやりと見」るとは、この場合どのような見方のことか。十字以内で答えよ。

**答**  
抽象的な見方。(七字)

問 傍線部Hがあれば、物事をどのように判断できるのか。最も適当なものを、次から選べ。 **思**

- ア 曖昧さを残す
- イ 人間としての個性を重視する
- ウ 先入観を入れない
- エ 人間としての権利を保障する
- オ 日ごろの行いを加味する

**答**  
ウ

問 傍線部Iについて説明した次の文の空欄に入る適当な語句を、①と③は九字、②は三字でそれぞれ本文中から抜き出せ。 **思**

抽象的思考とは、意味の限定された言葉で思考することではなく、**①**から想像し、関連するイメージを補完して考えることであり、それによって物事を**②**に捉えたり、**③**したりすることが可能になることである。

**答**  
① 漠然としたイメージ ② 客観的 ③ 類似したものを連想

### 発展問題

問 次の文章を読んで、後の(1)～(3)に答えよ。 **思**

サンプルでは本文を省略させていただいております。

サンプルでは本文を省略させていただいております。

(『知的創造のヒント』外山滋比古)

(1) 波線部の「ほかの命名を拒む」とはどういう状態か。《知的創造のヒント》の本文中の語句を用いて、三十字以内で答えよ。

**答** モノとコトバとの間に「対」の対応が成立してしまっている状態。(三〇字)

(2) 波線部とは、「具体」から「抽象」へ《》においてどういうことか。それを説明した次の文の空欄①・②に入る語句を、①は漢字二字、②は五字以内で、「具体」から「抽象」へ《》からそれぞれ抜き出せ。

言葉が ① と化して、指し示す意味を ② ということ。

答 ① 記号 ② 限定する(四字)

(3) 《「具体」から「抽象」へ》をX、《知的創造のヒント》をYとしたとき、両者を比較して説明したものとして最も適当なものを、次から選べ。

ア 子供の言語習得について、Xでは、言葉を覚えれば覚えるほど、対象の抽象的なイメージや思考方法が具体的になるため、用いる言葉が無機質なものに変わると述べられているが、Yでは、言葉を覚えることで自分をとりまく世界を整理していくことができる」と述べられている。

イ 言語の性質について、Xでは、円滑なコミュニケーションを目指して使用される言語は、意味を抽象する性質を帯びていくものである」と述べられ、Yでは、言語は世界を差異化・分節化していく性質を持つものである」と述べられており、それぞれ異なる内容が指摘されている。

ウ 比喩表現について、Xでは、抽象的思考には、情報が伝わりにくくても婉曲的に表現することが必要であるとし、Yでも、具体的に表現することが求められる大人と異なり、成長過程の子供は比喩を用いるべきである」としており、いずれも特定の条件下では肯定的に捉えている。

エ 抽象的な思考について、Xでは、物事をさまざまな角度から考える客観性を持ち、アイデアを生み出すことにつながるものである」と述べられ、Yでは、言語を習得していく子供だけではなく、大人にとっても、豊かな創造性を持ち続けるために必要なものである」と述べられている。

オ 「具体」と「抽象」の関係について、Xでは、「具体」的な表現と「抽象」的な表現が相互に補完して人間の思考を構築していく様子が述べられているが、Yでは、「具体」化されていく子供の思考に歯止めをかけるはたらきのあるものとして「抽象」的な思考があげられている。

答 エ